音読を楽しもう　大阿蘇

―群読を通して「自己コントロール力を基盤とした批判的思考力」を育む―

福　永　奈央美

1. はじめに

2023 年度に行った本研究は、京都教育大学附属京都小中学校の研究開発の一つとして行った。本校では、「義務教育 9 年間で資質・能力を育成するための教育課程の再構築に関する研究開発」をテーマに各教科で開発と実践を行っている。この研究開発の中では、本校で育てたい生徒像に必要な資質・能力として「リーダーシップ」・「チームワーク」・「社会参画性」・「自己コントロール力」・「批判的思考力」・「創造的思考力」・「論理的思考力」・「コミュニケーション力」の八つを挙げている。2022 年度からは、これらの資質・能力の中からフォーカスするものを各教科の内容に応じて二つずつ選び研究開発を行っている。本校国語科では、2022 年度は「コミュニケーション力」・「論理的思考力」、2023 年度は「自己コントロール力」・「批判的思考力」にフォーカスした。

2.「自己コントロール力を基盤とした批判的思考力」

本校国語科の 2023 年度の研究の柱として「自己コントロール力を基盤とした批判的思考力」を設定した。「自己コントロール力」は、作品の読みや話し合いの場において、言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を深め、集団のものの見方や考え方を発展させようとする態度や、自己を表現し、他者と共感することで互いの存在を尊重し、心を豊かにする態度を育むために必要となるものである。また、「批判的思考力」は、作品の読みにおいて論理や既有知識に基づいた吟味、補足、精緻化を行い、読みを深めていくために必要となる力であり、話し合いの場においては、自他の考えの交流を通して、自身の思考過程を意識的に精査し、自他の考えを広げたり深めたりするために必要になる力である。以上のことを踏まえると、自他のことを振り返り、新たな問いや課題を見つけ出そうとするという適

切な「自己コントロール力」が働けば、それに伴い自他のものの見方や考え方を発展させ、互いを尊重しようとする姿が現れる。また、そうしてものの見方や考えを発展させようとしたとき、物事を様々な角度から捉えて評価・判断しようとするという「批判的思考力」が発揮される。これが、本校国語科の考える「自己コントロール力を基盤とした批判的思考力」である。

3. 生徒の姿や思考タイプ

資質・能力が育成され発揮されたかどうかについては、具体的な生徒の姿によって見取ることができる。本研究は中学一年生を対象に行ったため、中学一年生の発達段階における生徒の姿を明確化した。「自己コントロール力」においては、「作品の読みや話し合いの場において、根拠を明確にしながら自分の考えを確かなものにするとともに、他者の考えとの共通点や相違点などを踏まえて自身の考えを振り返り、精査していくことができる。」を具体的な生徒の姿とした。「批判的思考力」においては、「作品の読みや話し合いの場において、比較や分類、関係づけなどを活用したり、文章の構成や展開、文脈の結びつき、叙述の仕方などの工夫に気づいたりすることで、自らの評価や判断を導き出すことができる。」を具体的な生徒の姿とした。

また、生徒の分析と指導のために、思考によって三つのタイプに分けた(図 1)。これらのタイプに優劣はない。また全員を明確に割り振るものでもなく、複数の思考タイプを持つ生徒もいる。

4. 単元・授業の内容と分析

本校国語科におけるこれまでの研究成果をふまえて、本実践を計画した。「自己コントロール力を基盤とした批判的思考力」を反映させた実践であること、「3. 生徒の姿や思考タイプ」を十分に見取り、反映させた実践であることを十分に視野に入れた実践となるように図った。

単元を貫く言語活動として、「言葉・表現・場面・描写・リズムを手掛かりに想像豊かに読み味わい、私達の考える『“大”阿蘇』を表現豊かに群読する。」を設定した。題名に「大」がついていることから、作者は阿

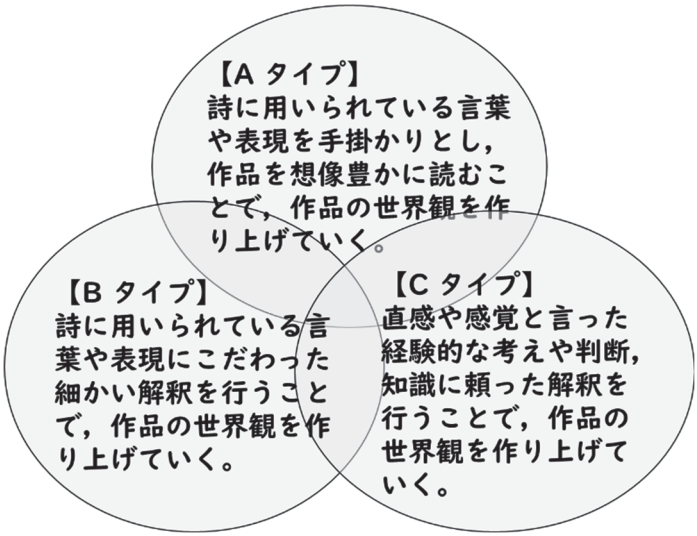


図１　生徒の思考タイプ

蘇山に何かしらの大きさを感じているといえる。この「大」をどう捉えるかは読者により異なる。明確な答えがないものを設定することにより、生徒の資質・能力をいっそう育めると考えた。

第１時は、二編の詩を読み、想像豊かに読み味わったり、表現豊かに読んだりすることを楽しむことを行った。草野心平の「河童と蛙」に登場する「大河童沼」という言葉からは、河童そのものや沼自体が大きい、河童の数の多さから集団の大きさが読み取れる、といった意見が出た。そこで、「それらの『大』を表現するにはどうしたらいいか」という問いを投げかけたところ、読む人数の増加や、声の大きさやトーンの変更といった工夫をしつつ、何度も繰り返し音読をする姿が見られた。またお互いに音読を聞き合って、どうすればいっそう「大」を表現できるのか振り返り、精査する姿が見られた。この姿から「自己コントロール力」の発揮を見取ることができた。

第２時は、阿蘇山のイメージを持ったうえで、「“大”阿蘇」に対する自分の考えを持った。この時点でも様々な解釈が見られた。例えば、思考タイプがＣタイプの生徒は、阿蘇山の映像から広大な草原のイメージを持ち、

それこそが「大」阿蘇であると解釈した。Bタイプの生徒は、「一頭、二頭」という数を表す表現や「群れ」という言葉から、馬の数が多くいるのだろうと考え、それが「大」阿蘇であると解釈した。Aタイプの生徒は、視点がカメラを引いていくように少しずつ広がっていくことから、空も大地も馬も雨もすべてを含めた広大な自然が「大」阿蘇であると解釈した。詩は、用いられる言葉や表現が少ないからこそ、言葉ひとつひとつにこだわった細かい読みによる解釈を行うBタイプの生徒が多いと予測していたが、この時点では実際にBタイプが大半を占めた。中には作品の読みの中で自らの評価や判断を導き出そうとする姿も見られたが、視点に偏りが多く、「批判的思考力」を発揮した様子は見られなかった。

第3時は、それぞれの考えをグループで交流し、「“大”阿蘇」を群読で表現するための工夫を考えた。グループを組むときには、前回の授業後に回収した各自のプリントからそれぞれの読みを確認し、Aタイプ・Bタイプ・Cタイプの生徒がグループの中に1人以上いるよう作成した。1グループの人数は5～6人とした。話し合いが効果的に行える人数の中で、少しでも多人数と組むことで群読の仕方に幅が出るように考え、この人数にした。ここでの交流では、詩の本文が書かれた拡大用紙に各自の解釈や読み方などを書き込んで記録した。記録には様々なタイプの読みがグループの読みとして採用されており、Aタイプの生徒が言葉の細かな解釈に興味を持つ、Bタイプの生徒が全体のイメージから膨らませようとする、Cタイプの生徒が自分のイメージと繋がる言葉を根拠として見つけるなど、互いに読みの視点を広げている様子が見られた。ここからは、「批判的思考力」の発揮を見取ることができた。一方で、各自が意見を受け止めるだけで終わってしまい、根拠の追及や意見同士の関連付けが起こらず、個々の意見を書き出しただけになってしまったグループもあった。

群読の工夫としては、声の大きさ、速さ、調子、強さ、読む人数の変更などがあった。メンバーの個性を生かし、低く落ち着いた声の生徒を当てはめるといった工夫が見られた一方、機械的な割り振りや、馬が増えたから人数も増やすといった「大」との関連がわかりにくい工夫もあった。

第4時は、代表グループが自分たちの読みや群読での工夫を発表し、学級全体でその妥当性を分析した。代表グループには最も多かったBタイ

プの読みを行ったグループを選んだ。代表グループは、自然の大きさを中心に読みを進め、雨や馬、空の様子などを細かく解釈した。例えば「雨は蕭々と降っている」という部分には「静かめ」という書き込みをし、「蕭々と」と「降っている」の間に間を入れ、「降っている」を大変ゆっくり読みながら、文末が消えていくように読んだ。また、「もしも百年がこの一瞬の間にたったとしても何の不思議もないだろう」の部分では、「百年」をゆっくり読む、「一瞬の間」を速く読むなど、言葉の意味のままの通りの読み方をした。その一方で、「何の不思議もないだろう」の部分に「さみしそうに　フェードアウト」と書き込みをして、そのように読んだ。

聞く側の生徒には、思考の助けとするために模造紙のコピーを配布した。しかし、そこに書かれた言葉に引っ張られず、音声でそれが伝わってくるかどうかを考えるよう指示した。また、代表の音読を聞きながら、頭の中で映像化し、具体的なイメージを思い浮かべるよう指示した。さらに、できる限り具体的に言葉に表すことも重視するよう指示した。

妥当性を考える中で、教師側でいくつかのポイントを指定した。一つは、「一頭　二頭」で読む人数を増やすという工夫だ。これは多数のグループが採用した工夫だったため、果たしてこの工夫で「大」阿蘇を表現できるかを考える機会を作った。班の中では、言葉の解釈としては増えているが、群読の工夫としては疑問が残るという意見が出た。その中でも「視点がカメラを引くように広がっていく」という意見をもともと持っていたグループからは、「ここから先、馬から山へ、煙へ、空いちめんへ、草千里浜へ、百年というときへ、とどんどん広がっていくことを考えると、人数を増やすだけでは人手が足りなくなるし、広がりを表現しきれないから、別の工夫が必要なのではないか」という意見が出た。それにより、代表グループを含め、細かな言葉の解釈ではない部分を読む思考の仕方に気づいた。自己を振り返ったという点と新しい視点を獲得したという点からもわかるように、ここでは「自己コントロール力を基盤とした批判的思考力」が発揮された。

また、「重っ苦しい噴煙」の「重苦しく」と、「空いちめんの雨雲」の「元気よく」とのギャップについて考えさせた。今まで直感的な感覚や自分の経験に基づいて意見を言っていたCタイプの生徒は、次のように発言した。

「雨の様子や馬が草をたべているところなどは、少し違いがあっても、最後まで何度も繰り返されているから、この変わらない大自然を表そうと思ったら、工夫を大きく変えるのは違うのではないか」。ここからは、作品全体のイメージを捉える読みの思考が活かされていることがわかり、ここでも「自己コントロール力を基盤とした批判的思考力」の発揮を見取ることができた。

さらに、「なんの不思議もないだろう」の「さみしそうに　フェードアウト」については、「さみしそう」という感覚が共感できるという生徒もいれば、そうでない生徒もいた。そこで、「共感した人は、どうしてさみしさを感じたのかを考えてみて」・「共感しない人も、代表班は何を寂しいと感じたのだろうか？と考えてみて」と追発問し、話し合いを行った。すると、「百年という時の中に自分がぽつんといる感じ」や、「永遠の時間の中で考えると、自分の時間なんてこれっぽっちしかない」、「雄大で壮大な自然の姿、悠久な時間の大きさと、自分を比較したときの孤独感」などといった意見が出され、この一文に込められている筆者の思いに迫ることができた。この話し合いの中では、「さみしそう」を実際に音声で表現してみようとする班もあった。実際にやってみると、その生徒は「いや違うな」と首をかしげ、どうすれば表現できるかを皆で模索していた。ここでも、「自己コントロール力を基盤とした批判的思考力」の発揮を見見取ることができた。

単元の最終である第５時は、第４時の授業を踏まえて工夫について再考し、自分たちの考える「大」阿蘇が伝わるように群読しあった。また、群読からどのようなことが伝わってきたかを互いに発表し合い、伝えたいことが伝えられたかを振り返った。そのうえで、作品の読みや群読を通して考えたことをまとめた。群読については、作品全体のイメージなどをもとにして全体の読みを反映した工夫や、言葉ひとつひとつを解釈した工夫など多様な工夫が見られた。しかし、聞く側になったとき、音声からどうイメージしたのかを言語化することが難しい生徒がほとんどであった。群読する側としては考えの広がりや深まりが見られたものの、聞く側としては能力が伸びなかった。ただ、「大」阿蘇についての読みは、筆者の思いや悠久の時、自然の雄大さなどに行き着くことができており、目指していた

ところまでたどり着くことができた。

5. 成果と課題

「自己コントロール力を基盤とした批判的思考力」を育てるために、「私たちの考える『“大”阿蘇』を表現豊かに群読する」という活動は大変効果的であった。群読は自分たちでの振り返りがしやすく、どうすればより良くなるかを考え、精査していこうとするため、「自己コントロール力」が発揮される活動だ。さらに、群読をしようと思うと全員で「“大”阿蘇」のイメージを作り上げていく必要があるため、様々な視点から評価・判断しようとし、「批判的思考力」も発揮される。また、「自己コントロール力を基盤とした批判的思考力」とは少し離れるが、「“大”阿蘇」は生徒たち皆が自分なりのイメージを持つことができるものであった。そのため、新たな発見をしたり、群読して表現したりすることを大変楽しんでいた。詩を難しいものと考えず、もっと身近で、自分なりに解釈して、多様な楽しみ方ができるものだと生徒が実感できたことも一つの成果である。現在も同じ学年の生徒と国語の授業を行っているが、学年が上がって音読には少し照れくささが出てきているものの、詩を取り扱うたびに楽しんで読んでいる。

一方で、音読する側ではなく、音読を聞く側としての課題が残った。群読をし合ったとき、聞く力が不足しており、音声だけでは自身の評価や判断を導き出すことができなかった。代表グループの音読の妥当性を考える時は書き込みをもとに評価や判断をしていたが、まとめの授業では書き込みが記載されたプリントは無く、振り返るための意見が十分に出なかった。聞く側としてそもそも自己表現ができず、ものの見方や考え方を深めようとすることが難しかったため、適切な「自己コントロール力」を働かせることができなかった。また、声の大きさや間などの明確な工夫を求めすぎたがゆえに、自由な発想を阻害したことも「自己コントロール力」を働かせることができなかった原因になった。「さみしそうに」のところで生徒が首をかしげて何度も音読を試す場面があったと先述したが、例えばそこでの音読の工夫を声の大きさや間などに言語化することができなくても、音読による読みの違いを考えることや何が妥当なのかを判断することはで

きたと思われる。音読を聞いて、そこからどう聞こえ、どういう情景を思い浮かべたかを言えるようにすることや、言語化できない部分も試行錯誤することができれば、適切に「自己コントロール力」が働き、そこから「批判的思考力」を発揮することに繋げていくことができると考えられる。課題については今後も研究・開発を進めていきたい。

（京都教育大学附属京都小中学校教諭）

参考文献

・田村学（2018）『深い学び』東洋館出版社
・京都教育大学附属京都小中学校（2022）『令和４年教育実践研究協議会　義務教育９年間で資質・能力を育成するための教育課程の再構築に関する研究開発～縦（各学年）と横（各教科・各領域）のつながりを構築したカリキュラム再構築～』
・京都教育大学附属京都小中学校（2023）『令和５年教育実践研究協議会　義務教育９年間で資質・能力を育成するための教育課程の再構築に関する研究開発』